

俺は不機嫌だった。このところずっと不機嫌だった。そういうわけで、俺は助手の書いたつまらん論文を机の上に叩きつけると、ばがあと怒鳴った。

「おまえの書いている文章は、論文とは言わねえんだ。単なる空想小説だ。クリスタルシティ崩壊の原因が、エネルギー施設の不備が遠因となっているなんて、どこに根拠があるんだ。どこにそんな施設があったんだ？帝都の地下にも都市があったって？発掘でもしたのか？いいか、俺たちの研究つてのはなあ、現存する物的証拠から昔の姿を推定していくことなんだ。おまえの書いているものには、物的証拠が何もないだろう。」

奴は、上目遣いで俺の事を見ていた。そして、何か言いたそうにしていたが、無視することにした。俺はこいつが気に入らなかつたからな。こいつはまだ十代なのに、もう結婚していて、しかもガキまでいるという。嫁さんがまた美人らしいんだ。俺はというと、今年三十五歳でまだ独身。うむ。：ま、そんな事はどうでもいいか。とほほ。俺は、気を取り直して懸案事項の確認をすることにした。

「ところで、あの根付の調査は進んだのか？」

根付ってのは、腰からぶら下げる小物入れを、紐で結わえる際に使用する、意匠の施された留め具のことで、芸術的価値も高い工芸品なんだ。今回の根付は、マイヤー帝国領の遺跡を調査した際に見つけたものだった。

「あれは、魔道の品でした。」

始まったよ。こいつ、何かというと、魔道の話を始めるとな。

俺は、魔道は嫌いだって言ってるだろうが。そんなオールド・テクノロジーなんざ！それで、俺はもういっぺんばがあと怒鳴ってやる

うかと思って息を吸い込んだ。

「この制作者は、病人の快癒を祈ってこの根付をプレゼントしたんです。この猫の安らかな表情といい、暖かな感触といい、愛情の込められたいい作品です。ヒーリングの効果もありました。」

だから、なぜ、おまえに、それが分かるんだと言いたい。それは、おまえの単なる想像だろうが。：ヒーリングの効果？

「ひよっとして、おまえ、それ使ってみたのか？」

「すいません！」

俺は、やれやれと思って、平謝りする助手を怒鳴るのをやめた。というのも、こいつの嫁さんは病気だからなんだ。それも、かなり悪いらしい。どうも、長くはないみたいなんだな。こればかりは、俺もこいつが気の毒だと思うよ。直接聞いたわけではないから、正確ではないかもしれないが、なんでも呪われた宝石のせいで病気になるたということだ。モチロン、俺は呪いなんてこれっぽちも信じられない。本当のところは、その宝石ってのは半減期が1万年くらい放射性物質だったらしくて、それで全身に癌ができたらしい。呪いの正体なんて、そんなもんだよな。

そして、そういった噂は、俺の周辺の独身男どもにはよく知られた。こいつは若くして美人と結婚してガキまでいるんだから、当然やっかむ奴もいるわけさ。それで、いっぺん、嫁さんのことこいつをからかった奴がいたんだが、こいつは病院送りにされてしまつて、それ以来誰もこいつの嫁さんの病気の件には触れなくなった。うむ、どっちの気持ちも分かる気がするが、人の不幸を喜ぶ奴なんか最低だよな。

「もういい。その根付の研究は、全て君に任せる。」

「ありがとうございます。」

「あげるわけじゃないから、勘違いすんなよ。」

「はい」

おっと、何か忘れていると思ったら、自己紹介がまだだったな。

俺は、チェロン王立大学教授のコンラッド・ロバーツだ。東の大陸

の失われた帝国、マイヤーの古代史について研究している。身長一八四センチ、体重は七〇キログラム。BWHも知りたいか？ま、それは遠慮しておいたほうがいいだろう。髪の色は黒で、銀色がちょっと入ってる。おしゃれだろ？

一応、助手のほうも紹介する。こいつは、さかきじよた。俺の弟子だ。肩書きは助手ってやつさ。童顔で、俺様ほどじゃないが、そこそ女にもてるらしい。(誰だ？そこで、なんでまだ俺に嫁さんがいないんだ、なんて言ってるやつは？鋭いぜ。)青い髪にくりつとした目がかわいいんだそうだが、嫁付き、コブ付きってことで、ご愁傷様。安月給の甲斐性なしだから、病気の嫁さん抱えて生活は相当苦しいはずなんだが、あんまりそういう話は聞かないな。

「あの…」

「ん？ああ、なんだ。」

かわいい？こういうモジモジした態度がいいのかね？よく分かんが。気持ち悪いやつだな。

「あの、お願いがあるんですが。」

「おう、なんだ？言ってみろ。」

2

しつこいようだが、俺は機嫌が悪かった。それは、弟子の分際で師匠よりも早く結婚していたとか、しかもガキができちゃったとかそんな理由じゃない。勿論、いきなり休暇を取って嫁さんと温泉に行ってしまったという理由でもない。…温泉というと、混浴なのだろうか。うむ、機嫌の悪い理由のひとつかもしれないな。だが、それ以上に、研究室にやってきたこの男、四十代くらいの古物商らしき男が気に入らなかつたのだ。

そいつは、銀縁眼鏡をかけた目を線のよう細めて、でかい口をにんまりと三日月状にしてニタニタとお愛想笑いを浮かべていた。一言で言うなら、チェシヤ猫といったところだ。

俺は、こいつらの商売が嫌いだった。奴らは金にしか興味が無いからだ。俺たちの仕事は、発掘された都市や道具にロマンを見いだすことなんだよ。かっこいいだろう。例えばさっきの根付なら、誰が作ったのか？そいつは、どんな生活をしていて、どこからどこへ行ったのか。仲間はいたのか？一人だったのか。そして、そいつの作品が他にもあるのか？等、まあこんな想像力を働かせるんだ。ここで注意すべきは、物的証拠もないのに勝手に想像しないということだ。俺の助手は、まだそこんところが分かってない。あいつは、勝手に想像して作っちゃうからな。まあ、想像力はあるんだろうが。「こちらで、マイヤー終末期の魔道具を発見なさったと耳にしたのですが。」

「魔道具なんざねえよ。」

ああ、あれか、と思ったが、俺は黙っていることにした。あいつが使うんだから。

「アイゼナツハの作品は、我が国では高く評価されておりました、コレクターの垂涎の的なのですよ。」

「無いものは、無い。」

我ながら、ちよつとぶつきらぼうだったし、態度が悪かったかなと反省した。だからって、これはないよな。拳銃で脅すなんて。

3

そう言うわけで、俺はまた機嫌が悪かった。俺の運転するシューターは、雪道を時速八〇キロくらいの速度で走っていた。念のために断っておくが、俺様の運転技術はかなりアレ、まあ、上手な方ではない。だから、ゆっくり走りたい。しかし、後部座席から拳銃をぐりぐりと突きつけられて、急かされたのでは仕方がない。くそ！こいつと心中なんて、ごめん被りたいぞ。

「根付は、どこにあるのですか」

「助手が持っている。今頃は温泉宿だろう。」

時間稼ぎが必要だった。とりあえず、こいつを研究室から追い出せばなんとかなると思った。王立の大学には私設軍隊が常駐しているからな。買収されていなければ大丈夫なはずだ。しかし、そうは問屋が卸さなかった。

「案内してください」

くださいと言う割には、黒光りするものを前面に押し出してくるという失礼な奴だが、嫁も貰わずに死ぬなんて最悪だからな。それで、こうやって慣れないシューターを運転しているというわけなのだ。

「しかし、あれがそうまでして欲しくなるようなものかね。」

「アイゼナツハの晩年の作品には、彼女の命が込められていると言われています。」

なるほど、じよたの言っていたことも、あながち嘘じゃなさそうだな。あいつ、どこからそんな情報を仕入れたのかな？

「彼女の晩年、十年間の作品を全て揃えたいというお客様がいらっしやいます。」

「ひよっとして、揃えればどうにかなるのか？」

俺は、ちよっとだけ、ピンと閃くものがあつた。

「：ご存じないのであれば、知らない方がよいでしょう。」

ふーん。じよたに教えてやれば、あいつ喜ぶかもしれない。

「ところで、助手と俺の身の安全は、保証してくれるんだろうな。」

「ものが手に入れば、命までは奪いません。」

俺たちの乗ったシューターは、市街地を遠ざかり、リアを滑らしながらワインディングロードを通過して、温泉街に入っていた。盆地にひっそりとたたずむ深夜の温泉街は、湯煙に包まれて幻想的な雰囲気を醸し出していた。じよたのヤロー、あいつ今頃嫁はんとよろしくやっついていやるんだろうな。畜生！俺だって、今に見てるよ。

「まだ到着しないのですか。」

「あの橋の向こうだ。」

シューターは、盆地の中央を流れる湯の川にかかる大きなアーチ

橋にさしかかった。このとき、俺は別にこいつを振り落としてやろうとか、激しく抵抗してやるとか、そんなことを考えていたわけじゃないかったんだ。どっちかっちゅうとだ、根付なんかさっさと渡しちゃまって、俺も温泉に入るぞ。混浴に入ってやる！じよた、おまえだけに良い思いはさせねえ！という、とつてもスケールの小さな、しかし強烈な感情に支配されていたということを俺は告白する。素直なことっていいことだからな。ま、どっちにしろ、前方不注意だったってことには変わりなかった。

「うあっ！」

踏切が閉まってたんだな、これが。俺は、ハンドルを思いっきり右に切りつつブレーキペダルを踏みつけた。シューターは、右回りにぎゆるぎゆるとスピニングして、やがて止まった。踏切に突入しなかったのは、ただ運が良かっただけなんだろう。そして、もう一つ幸運が起きた。チェシヤ猫の野郎、開いたドアから道路に転落してやんの。しかも、拳銃を落っことして、その拳銃は、雪かき処理用の格子蓋の中にドボン。ざまみろ！

「怪我はないか？」

俺は、安心しきってチェシヤ猫の野郎に近づいた。もう拳銃は無いんだ。野郎が拳法の達人か、プロレスラーでもない限り、やられる心配は無いからな。でも、その時、俺はどきつとしたんだよ。なんでかって？野郎、笑っていやがったんだ。

「素晴らしいドライブングテクニクですね。」

チェシヤ猫の野郎は、ぱたぱたと体に付着した雪を払った。そして、野郎がコートの袖を叩いたとき、黒光りするものが、すっと現れた。

「拳銃は、もう一丁あるのですよ。」

その時、踏切を列車が通過した。俺は、列車から飛び出た手すり状の部分を必死につかんだ。周囲で幾つか火花が炸裂した。へたくそ！そして、そのまま魅惑の温泉街を後にした。

「うちの人が、いつもお世話になっております。」

「い、いやあ、こちらこそ。」

それは突然の来襲だったんだ。じよたが研究室に嫁さんを連れてくるなんて。体調は大丈夫なのかよ。それに、ちよつと気になることがあるんだ。彼女は、病気のせいかな青ざめた顔色で、頬も痩せかけて、手足も針金のように細いけど、俺の記憶に間違いがなければ、ひよつとしてこのお方は…。

「もう王族じゃないんです。シエリル・さかきです。」

やっぱりかよ！あこがれのロイヤルファミリィ。

「私は、こ、コンラッド・ロバーツです。失われたマイヤー帝国の歴史を研究しております。えー、歴史の研究を通じて、…通じまして、古きものの中から新しきものを見いだし、祖国の発展に努める所存でございます…」

むっ！じよたのやつ、何にやにや笑ってたんだ。弟子の分際でえ！

おまえが説明してみろ！

彼女が、あんなに元気そうに研究室にやってこられたのは、例の根付の効果だったのかもしれない。今、研究室の中には、不肖の弟子じよたの姿はなく、勿論彼女もいなくて、俺一人だ。彼女の体調が、また悪くなっただんだ。俺は彼らに何もしてやれない。だから俺は不機嫌だった。そういうわけだから、ここんとこずっと俺は不機嫌だった。